

## ＝ 「節目」…ふしめ&amp;せつもく ＝

コロナ禍で各種会議・委員会の持ち回り開催やWEB開催、そして研修会やセミナー等の各種行事の延期や中止を余儀なくされている。そんな中、労働組合の最高議決機関である定期大会の開催とその方法について各産業別組合でも悩んでいる。7月から8月にかけて開催する組織では、WEBや書面開催のもと議案採決の取り扱いなどを検討しており、基幹労連もそうした動きを注視しながら、加盟組合の参画意識を大切に検討している。

他方、多くの課題が残る中で6月17日に第201回通常国会が閉幕した。第2次補正予算総額は過去最大の約32兆円、補正額の5割は企業の資金繰り支援や中小企業への持続化給付金等に充てられるというが、国民の生活確保はもとより、深刻な影響が出ている産業や企業を支えるための迅速な施策の実行が必須である。

また、私たちの雇用と生活の安心・安定を図るためには、経済の本格的な回復も重要課題であり、経済面においてもコロナ禍での危機対応に関して途切れることのない施策の検討と早急な実施が求められる。

東京財団政策研究所の小林慶一郎先生がとりまとめられた「積極的感染防止戦略による経済社会活動の正常化に向けた緊急提言」によれば、緊急事態宣言も解除されたが、危機を脱したわけではなく一時の安堵感から対策強化の手を緩めれば、自粛や休業を繰り返すことになる。それを避けるには、まずは検査や医療提供体制の機動的増強、ICUなどの設備増強に加え、必要な防護服等の医療物資を十分かつ適切に提供すること。また厳しい状況に晒されている医療機関の経営面への影響にも十分配慮した支援等が必要であること。そして「積極戦略」にはコストがかかるが、自粛や休業を繰り返す「受け身」の対応のコストはさらに大きく、中長期的には「積極戦略」の方が経済社会の正常化も早まる。というものであり、医療か経済かの2項対立ではなく、医療のため、経済のための戦略が必要と述べられている。

嫌だけど、長い付き合いになるであろう新型コロナウイルスとの関係を考えれば、こうした提言の実践が次なるステップに向けた節目となるはずである。

節目という文字は「ふしめ」だけでなく「せつもく」とも読む。「ふしめ」と「せつもく」の違いは、「せつもく」の方が区切りが細かいということ。「ふしめ」より、もっと細かい区切りを表現したい場合に使うらしい。

新型コロナウイルスの出現で、働き方も、生活も大きく変わっていかざるを得ないことは、外出自粛や在宅勤務、感染防止の取り組み等を経験した多くの皆さんが認識を同じくするものだろう。そのもとでも労働運動は、組織と組織、人と人との繋がりをつくりあげていくものだけに、すべてをデジタルに置き換えることはできない。第4次産業革命やSociety5.0、あるいはデジタル社会の到来と言葉では触れてきたが、目の前に突き付けられると、なんとも頭の痛い課題である。

そんな中、テレビ番組でも取り上げられていた五木寛之さんの随筆、大河の一滴が今また読まれているという。「泣くのはいいけども、泣き言は言うな」という言葉、現状を嘆くのではなく、自分がその環境の中で何ができるかを考え行動することが大事だとの教え。なんか身につまされ悩み倍増。しかし、私には足らざるを互いに補える仲間がいる。みんなに聴こう、知恵を借りよう…、活路はどこかにはあるはず。そんな節目（ふしめ）の時代であることをチャンスと捉えたい。

今月は、全国安全週間、そして基幹労連安全衛生対策強化月間である。2月と7月、この年2回の取り組みは節目（ふしめ）。そして、日々の作業の中での「一動作・一確認」の行動は節目（せつもく）。暑い夏との戦いがはじまるが、大きな声かけで区切り・区切りの「節」をつくり、わが身と仲間を守っていこう。

極限状態の中でも人には笑いが必要、笑える状況じゃないときでもハッハッと笑う、ユーモアは人間の魂の支え…。と五木寛之さんのお話にある。

「嘆くこともあろうが、仲間に笑いを届けるべし…」自らに言い聞かせておきたい。

ご安全に

2020年7月1日

日本基幹産業労働組合連合会  
中央執行委員長 神田 健一